

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：42697

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11462

研究課題名(和文) 歯科衛生臨床教育におけるアクティブ・ラーニングを支援する質的評価の開発

研究課題名(英文) Development of a qualitative assessment to support active learning in dental hygiene clinical education

研究代表者

合場 千佳子 (AIBA, Chikako)

日本歯科大学東京短期大学・その他部局等・教授(移行)

研究者番号：50413141

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、歯科衛生士教育における臨床教育に着目し、学生が能動的に実習に取り組むためのアクティブ・ラーニングに影響する要因を分析した。その結果、附属病院や歯科診療所の実習では、実習評価のフィードバック効果もあり達成度も高くメンタル面のサポートも実践されていた。その反面、高齢者施設や障害者施設などの臨地実習では、多職種との連携にストレスを感じている学生が多く、実習評価では、学生の自己評価を中心とするポートフォリオの活用が望ましいと考える。さらに、4校の専攻科生を対象としたワークショップでは、専門性のある臨床教育や多職種連携の臨地実習での体験がキャリアデザインに影響を及ぼしたと述べていた。

研究成果の概要(英文)：Analyze the factors that influence students actively work on practice, in this study, focusing on clinical dental hygienist education for active learning. As a result, in the hospital and dental clinic, practice, and feedback of evaluation and achievement is highly practiced mental support. On the other hand, many students feel stress and multi-disciplinary collaboration in clinical practice, including the elderly and persons with disabilities. I think evaluation is desirable is a self-evaluation of the student portfolio.

Said influenced career experience in the practice of clinical training workshops in specialized and multi-disciplinary collaboration.

研究分野：歯科衛生士教育

キーワード：歯科衛生臨床教育 アクティブ・ラーニング ポートフォリオ キャリアデザイン

1. 研究開始当初の背景

歯科衛生士教育は、2005年に修業年限が3年制以上に移行し高齢社会のニーズに対応する口腔ケアの質の確保を担う専門的口腔ケアが実践できる歯科衛生士を養成することを目的に進められてきた。同時に、介護予防システムを基盤とした歯科衛生士の活動に対応すべき教育プログラムでは、多職種連携を歯科衛生士教育の中に導入することも求められた。

しかし、急速に進む社会変化に伴い、医療との連携強化、介護サービスの充実強化、予防の推進、多様な生活支援サービスの確保などを主な取り組みとする地域包括支援ケアシステムに対応できる歯科衛生士臨床教育カリキュラムは、全国の歯科衛生士養成校において展開されているが、地域社会から求められる歯科衛生活動の継続的な育成には至らず、卒前教育の在り方が問題であると指摘されている。一方では、多職種との協働を伴う臨地実習では、多くの学生に不安や緊張が伴い、強いストレスを受ける傾向があり、教育効果が余り得られていないのが現状である。さらに、実習評価は、技術面を重視した指導者による主観的な評価で行われている傾向であり、地域社会で活躍する上で必要となる専門職としての人間性や問題解決能力を評価しているとは言えない。これらの状況から、学生の能動的な学習態度であるアクティブ・ラーニングを充実させるためには、臨床教育の質的転換が急務の課題であると考えられる。

本研究を進めていくうえで、研究代表者は「T 短期大学専攻科における専門性の高い歯科衛生士教育の在り方に関する研究 - 1 報 認定専攻科における教育の有効性 -」

に関する研究を行い、本学認定専攻科における教育の有効性を明らかにした。結論として、専攻科の科目で必要性をより強く感じた教育内容のひとつに歯科衛生研究と多職種連携を含めた臨床・臨地特別実習を挙げていた。専攻科生の就職状況から分析すると、歯科診療所の割合より総合病院などの職域が多く、専攻科での臨床教育の経験が影響しているものと思われる。

また、分担研究者は「学位授与機構認定短期大学専攻科における歯科衛生士教育の実情」に関して研究を行った。A 短期大学専攻科では、歯科衛生士としてのライセンスを所持している専攻科学生に対し、担当患者の症例検討会を定期的で開催している。検討会を活用することで、歯科衛生過程の考え方に基づいた患者の問題点を深く追求することが可能となり、専門性を高める臨床実習が実現されている。

今回、歯科衛生臨床教育の質的評価を検討する際に参考にしたのは、申請者が大学生を対象に行った歯科衛生士業務の認知度と口腔の問題解決能力との関連に関する研究結果であった。大学生が歯や口に問題があると感じた際に、ストレス対処能力である Sense of Coherence (SOC) が高かった。さらに、大学生の健康保持能力と SOC との関連を明らかにし、処理能力が高い大学生ほど歯科衛生士の認知度も高く、自身の歯や口腔に問題がある場合には歯科衛生士を活用していた。

これらの結果から、多職種との協働が伴う臨地実習ではストレスを抱える場面も多く質的評価の評価法として SOC を用いることができると予測した。

2. 研究の目的

本研究では、本学と同じ教育システムである短期大学の歯科衛生士養成学

校を中心に歯科衛生臨床教育科目である臨床・臨床実習のカリキュラムに関する分析や歯科衛生学科生を対象に実習満足度やストレス対処能力の評価を行う。

また、臨床教育における現状を把握した質的なサポートを基盤とする授業展開を検討し、アクティブ・ラーニングを支援する方略を明らかにするために本研究を行う。さらに、臨床教育が歯科衛生士学生や専攻科生のキャリアデザインにおよぼす要因を分析する。

3. 研究の方法

(1) カリキュラムの実態把握

本学と研究分担者を含めた短期大学における教育内容を調査する目的で、事前にシラバスを郵送してもらい、それをもとに教育内容を分析する。また、臨床教育の問題点を把握するために、分担研究者とともに、協力校の専任教員および実習担当者にインタビュー調査を実施する。インタビュー調査から得られた情報は、山浦の質的統合法(KJ法)を用いてカテゴリ分けを行った後に、アクティブ・ラーニングに影響する問題因子を抽出し、2次元展開にて解決策を検討する。

(2) 臨床・臨床実習の満足度やストレスの評価

本学と研究分担者を含めた短期大学の歯科衛生学科第3学年を対象に、臨床・臨床実習の満足度を調査する。また、臨床・臨床実習終了後のストレス対処能力はSOCを用いて測定し分析する。SOCスケールの測定尺度は、29のフルバージョンタイプの質問項目を3つの下位尺度(把握可能感、処理可能感、有意味感)に分け構成され、それぞれの質問項目について7件法で回答し、29項目の得点を加算することでSOC得点が求められる。SOC得点が高いほどSOCが高いと評価し、ストレス対

処能力や健康保持能力が高いと解釈する

(3) 歯科衛生士臨床教育のコア・カリキュラム作成

平成24年に全国歯科衛生士教育協議会では、「歯科衛生士教育コア・カリキュラム-教育内容ガイドライン」を作成した。その後、歯科衛生士国家試験出題基準が改訂され、新しい教育内容が追加された。その結果、コア・カリキュラムの改訂も求められていた。歯科衛生コア・カリキュラムの作成にあたり、研究代表者と研究分担者は委員会のメンバーであり作成に携わっている。

(4) キャリアデザインを考えるワークショップの開催

全国の歯科衛生士認定短期大学専攻科に所属する専攻科生を対象にワークショップを開催した。ワークショップの目的は、本科での臨床・臨床実習を振り返り、自分のキャリアデザインに影響を及ぼした要因をリサーチすると同時に、アクティブ・ラーニングが実践できた実習先や実習に対する評価を話し合うことである。

さらに、地域社会に貢献することのできる歯科衛生士を育成するためには、どのような臨床教育プログラムが必要であるのか検討した。

4. 研究成果

27年度は、研究代表者と分担研究者の所属する歯科衛生士学校の臨床・臨床実習の教育内容や実施状況をシラバスの分析を中心に行った。具体的内容は、実習体制の概況、一般目標や行動目標に基づいた教育内容の状況、実習評価の項目、実習先の選択基準などである。実習先で多かったのは、歯科診療所や病院歯科であった。歯科大学付属の歯科衛生士学校に入学した学生は、入学当初から大学病院での臨床実習の期待は大きく、その反面で「歯科衛生士の臨床例を見学したい」や「歯科衛生士による臨床講義を希望する」な

ど、歯科衛生士による指導を望む学生が多かった。また、実習評価では、実習担当の歯科医師や歯科衛生士による主観的評価が中心となり、改善を要すると感じた。臨地実習では、他職種との協同を伴う実習先が多く、学生にとって多くの不安や緊張から強いストレスを感じている健康がみられた。特に、介護・福祉領域での実習先において、事前学習を充実させることが必要である。また、業務内容を把握させ、歯科衛生士が介入可能な業務については、学内での演習も必要である。

28年度は、臨床・臨地実習の満足度や直接、学生にインタビューを行い、アクティブ・ラーニングに影響を及ぼす要因について検討した。大学病院での臨床実習は、入学の動機になるケースも多々あり積極的に取り組む姿勢を示すが、その反面、知識や技能が伴わなかった際のストレスも大きかった。また、実習評価では、実習担当者の主観的判断に基づく評価であり、学生の成長過程に対する評価は不十分であった。その反面、他職種と連携をとる場面の多い臨地実習では、地域保健、障がい者施設、高齢者施設と領域は広いが、実習先の特徴も把握しやすい傾向がみられた。その結果、興味のある領域であれば、その現場で学ぼうとする意欲がアクティブ・ラーニングに繋がり、効果的な実習先であったと実習記録から把握できた。しかし、実習評価の有効活用では、学生個々の目標達成をフィードバックするには至らない学校が多く改善が求められる状況であった。

看護教育では、看護過程の考え方に基づいて臨地実習が進められることが多い。その教育効果は、患者をひとり受け持ち長期に及んで関わることで看護実践能力が修得できることである。歯科衛生臨床教育でも、歯科衛生過程の考え方を活用した臨床実習を活用することで学生の成長過程を把握した評価法やサポートが求められる。

5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

1. 田名網和紗・合場千佳子、周術期口腔機能管理における看護師のアセスメントの現状、日歯大東短誌、査読有、7(1)、2017、41-47.
2. 吉田隆・高坂利美・畠中能子 以下省略、歯科衛生士教育における学生の就業実態からみた学生支援に関する検討、日歯教誌、査読有、31、2016、3-11.

〔学会発表〕(計15件)

1. 市川順子・小池麻里・小口春久・合場千佳子 以下省略、歯科衛生士学生卒業時の意識とステークホルダー調査の比較-短期大学における教育の改善と質の向上をめざして-、日本歯科医療管理学会、2017.
2. 増田麻里・高坂利美・犬飼順子、短期大学生の食生活習慣と咬合接触状態との関係、日本歯科衛生学会、2017.
3. 中村郁恵・宮坂孝弘・合場千佳子 以下省略、臨床実習におけるコア・カリキュラムを活用した歯科衛生士教育の取り組み、日本歯科衛生教育学会、2016.

〔図書〕(計6件)

1. 合場千佳子・水木さとみ 以下省略、医歯薬出版、デンタルスタッフのためのクリニカルマナー「歯科医院における受付・患者対応と事務」、2018、102頁.
2. 合場千佳子・高坂利美・松井恭平 以下省略、医歯薬出版、最新歯科衛生士教本「歯科診療補助 第2版」、2017、331頁.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

特になし

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

特になし

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

合場 千佳子 (AIBA Chikako)

日本歯科大学東京短期大学・その他の部局
等・教授

研究者番号：50413141

(2) 研究分担者

高阪 利美 (KOUSAKA Toshimi)

愛知学院大学短期大学部・その他の部局等・
教授

研究者番号：90446188

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()